

「第4回アジア美術館の魅力向上に関する有識者会議」議事概要

■今後の方向性に関する論点の整理

（包括的な方向性）

- ・アジアの文化芸術は、これから飛躍的に力を増していくというエネルギーに満ち溢れている。そのなかでアジア美術館の拡充構想が出ているのは、非常に時宜を得たこと。
- ・福岡がアジアに対してできること、世界に対してできることを（そして他館や他都市にはできないことを）、ヴィジョンとして掲げるべき。
- ・都市全体のなかで、アジア美術館の活動がどのような役割を担うのかを考えるべき。
- ・地域に開かれた館として成功している先行事例からは、まち全体との連動の仕方や都市イメージの打ち出し方を学ぶことができるはず。
- ・「まちを歩いていたら、ふいにどこかでアジア美術館のエッセンスに触れることになる」ようなアメーバ的な展開をすることで、美術館が地域とつながるという方法もある。

（経営的視点）

- ・今後の活動内容を検討すると同時に、経営についても問題意識をもつことが必要。これまでの経営方法で収集や研究、企画に滞りが生じてきたのだとしたら、それを公立ミュージアムとしてどう見直していくのか考える必要がある。
- ・アジア美術の拠点として、研究者、コレクター、企業、アートファンなどさまざまな個人や団体とつながりを作り、サポートしてもらえる状況を作ることが、事業を継続していくためのリスク分散にもなるのではないかと。また、これらの人々がコミットしたいと思うように、うまくストーリー作りをしていくことが大切。
- ・各ステークホルダーに対してどのような価値を提供できる館になりたいのか、というのを具体的に考えていくことで、アジア美術館ならではの方策ができていく。

（具体的な活動）

- ・福岡アジア美術トリエンナーレの復活が重要。それは、アジア美術館がアジアの交流のハブとなり、福岡市が国際的な知名度を高め、都市の魅力を高めていくためにも、また市民のアジア美術館の認知度向上のためにも意味がある。トリエンナーレを再開し、例えばアジアの新たな世代のキュレーターをゲストに迎えるなどして、改めてアジア美術館を中心に新しいネットワークを作ってもらいたい。
- ・国内外の魅力的な美術館には対外的な顔になるような個性の際立ったスタッフがいる。キュレーターが個性的でユニークな活動によって存在感を示すことは、館の評価にもつながる。スポークスマン的なポジションの人を決めたり、ジャンルによって発信者を固定したりすることによって、自然な形でスタッフの知名度を上げていくことも可能だと思う。
- ・美術に限らない、映画、演劇、建築など他分野とも積極的に連携していくことが望ましい。

（新館について）

- ・新館の設計はその施設を「どのようなものにしたいのか」をよく考えてからでないと進められない。施主側のイメージが抽象的なままで設計者に投げてしまうと、よいものにならない。
- ・新館ができて展示面積が広がれば、アジア美術館のすばらしいコレクションをインパクトのある形で市民にアピールできる。そこには同時代の動向も加えられなければならない、そのための作品購入予算を十分に確保する必要もある。
- ・新館に併設する機能については、都心部の公共施設の立地状況に鑑み、図書室など若者が利用できる空間の併設など、公共施設だからできる内容を考えて欲しい。
- ・仮に既存の施設をリノベーションして新館を建設するのであれば、その試み自体が現代的な意味をもつ非常にチャレンジングなプロジェクトとなる。環境負荷への問題意識も高まるなかで、建設計画の意義づけの仕方も重要。